

第三回「鄭南榕先生を偲ぶ会」

葉菊蘭夫人や李敏勇氏も初参列

本会理事 多田 恵



鄭南榕烈士の遺影が
掲げられた会場

鄭烈士の身近な方々も参列

桜が満開の四月一日、東京・文京区の文京区民センターで第三回「台湾建国烈士鄭南榕先生を偲ぶ会」が鄭南榕顕彰会（宗像隆幸会長）の主催（事務局＝本会）により開催され、約百五十名が参列した。

今回は、台湾からご遺族の葉菊蘭夫人、鄭南榕烈士の同志で詩人の李敏勇氏ご夫妻、邱晃泉・鄭南榕基金会理事長など、鄭烈士の最も身近な方々六名が初めて参列した。

鄭南榕烈士は戒嚴令下の台湾で、言論の自由、政党の結成、二二八和平日促進運動（二・二八事件の真相究明）、台湾独立を求めた。四十一歳の一九八八年末、自身が発行する「自由時代」

誌に台湾共和国憲法草案を掲載したため、反乱罪容疑で召喚された。これを拒んで籠城した氏は「国民党は、私を逮捕できない。逮捕できるとすれば、それは私の屍だ」と声明し、翌年四月七日、警官隊が取り囲むなか、妻と幼い娘を残して焼身自決を遂げた。

自決の意味

第一部の「偲ぶ会」は早川友久・本会理事の司会で始まった。開会挨拶で宗像会長は、獄中闘争という選択肢もあつた当時、鄭烈士が敢えて自決を選んだのは、人間が生きていてはできないことをやるためだったと指摘。鄭烈士がやり残したことと今の台湾にとつて最も大切なのは台湾憲法の制定で、現憲法の台湾での施行はそもそも違法

で、民進党が改憲しようとしているのは危険だと警告した。

来賓の邱晃泉理事長は、二二八事件六十周年、二二八和平日促進運動発起二十周年の節目に、桜と富士の地で、日本人々と共に鄭南榕先生を偲ぶことが出来ることは特別だと語った。

国際社会での自由を

鄭烈士の遺志を受け継いで、立法委員（国会議員）となり、副行政院長や高雄市長などの要職を務めた葉菊蘭夫人は「台湾も独裁から民主自由の国になり、鄭南榕は天国で喜ぶ一方で嘆いていることもあるだろう。台湾には政治や宗教上の自由はあるが、国際社会での自由がない。中国は千基ものミサイルを台湾に向けていて、台湾の総統や官僚などは国際社会で自由な活動ができず、台湾人の人権が侵されている」と静かに訴えた。

続いて、柚原正敬・本会事務局局長がこみ上げる思いとともに祭文を奏上、



記念講演で「自由で美しい台湾をめざしたい」と訴える詩人の李敏勇氏（4月1日、文京区民センター）

参列者の気持を一つにした。その後、参加者全員が献花、それぞれ鄭烈士の御霊に敬意を表し、決意を報告した。

日本は台湾と自由共同体を

第二部の「記念講演」は、李敏勇氏が「自由への道、そして台湾の魂」と題して講演し、自作「冬の夜」忘れられた歴史」を自ら朗読しつつ、概ね次のような話をした（通訳は林建良・本会常務理事）。

「台湾と日本は理解しあえる国で、文

化の多様性を共有するが、台湾には主体性が欠けている。台湾が主体性を持つためには思想と哲学が必要で、台湾の再建には政治だけでなく文化も課題。自由人の共同体には人格が重要だ。自由で美しい国家を目指したい」「最近の鄭南榕の見方は、死を強いられた『烈士』というより、積極的に死を選んだ『聖者』とされている」

「台湾人は日本に対して特別な思いを持っている。外交関係こそないが、日本が台湾の独立を支持することを台湾人は期待している」

閉会に際して小田村四郎・本会会長は、三島由紀夫が「失われた主体性を回復せよ」と叫んで自刃したことが李敏勇氏の問題意識と重ると指摘。「台湾憲法を制定してこそ、葉夫人の求めた国際社会での活動も自由になる。中国は専制体制であり、日本の運命共同体は台湾以外にはなく、ともに台湾と自由共同体をつくっていきたい」と挨拶した。

今に生きる鄭烈士の思想

第三部「懇親会」は片木裕一理事が司会を務め、草開省三・日台交流教育会専務理事の開会挨拶の後、来賓の許世楮大使は「台湾は鄭烈士の思想に導かれ、言論の自由に向かっている」と語った。林建良・本会常務理事は「鄭南榕先生の遺志を受け継ぎ、台湾を完全なる独立国家にする」と決意を述べ、献杯の音頭を取った。

その後、何康夫・在日台湾同郷会会長、郭孫雪娥・在日台湾婦女会会長、丘哲治・日本台湾医師連合会会長などが思いを語った。駆けつけた萩生田光一・衆議院議員も参加者を勇気付け、ソプラノ歌手の森敬恵さんが「千の風になつて」を捧げた。黄文雄氏は、回を重ねるごとに参加者が増えていると指摘。最後に永山英樹・台湾研究フォーラム会長が「鄭烈士こそ台湾魂。台湾は尊敬できる友邦だ」とし、「日台万歳」三唱で締めくくった。